

# 松谷みよ子『ちいさいモモちゃん』論

—幼年童話集としての構造を中心に—

A Study on “Chiisai Momochan” by Miyoko Matsutani

山田 吉郎\*

Yoshiro YAMADA

## 序

松谷みよ子の童話作家としての活動は、代表作『龍の子太郎』(昭和35年、講談社)をはじめ『貝になった子供』(昭和26年、あかね書房)『ちいさいモモちゃん』(昭和39年、講談社)『モモちゃんとアカネちゃん』(昭和49年、講談社)など幅広く、また『民話の世界』(昭和49年、講談社現代新書)をはじめ民話に関する著作も数多い。文字通り現代を代表する童話作家の一人に位置づけられているが、本稿ではそうした松谷みよ子の著作の中で、いわゆる幼年童話に焦点を絞って考察することにした。具体的には前記の『ちいさいモモちゃん』を取り上げ、幼年童話作品として、また幼年童話集としての特質を分析したいと考えている。

民話に取材した『龍の子太郎』とはおもむきを大きく変えて、『ちいさいモモちゃん』所収の幼年童話は、生まれてから三歳に至るモモちゃんを主人公に据え、モモちゃんを見守る母親のこまやかな視線の中に、あたたかな色調で描かれている。幼児に語り聞かせる独特の語りの手法についても注目に値するものがあり、独自の幼年童話の様式を拓いたともいえるこの作品の構造をいくつかの視点から考察したいと考えている。

## 1 『ちいさいモモちゃん』の成立

童話集『ちいさいモモちゃん』の成立に関して、作者松谷みよ子の執筆意図や、執筆の経緯、書誌等については、作者の発言や全集等の解説において詳しく触れられている。本稿ではその点を詳述することは避け、幼年童話としての作品の内部構造に焦点をあてたいと考えているが、ただ書誌的な経緯については触れておかなければならないであろう。

『松谷みよ子の本』第一巻(平成6年10月、講談社)所収の書誌「初出と底本」<sup>(註1)</sup>によれば、昭和37年から39年にかけて『続ね、おはなしよんで』をはじめいくつかの雑誌に発表した作品に、新たに数篇を加え、童話集『ちいさいモモちゃん』(昭和39年7月、講談社)が編まれている。収録作品は十五篇で、モモちゃんが生まれてから三歳にな

るまでの物語を、ほぼ成長の時間的順序に沿って配列している。ただ、ここで注意すべきは、これらの収録作品が実際に発表されたのは、必ずしも主人公の成長の時間的順序に従っていないことである。つまり、収録作品は童話集『ちいさいモモちゃん』を構成する段階で大規模な置き換えがなされたということである。次に、収録作十五篇の構成と書誌を前記の『松谷みよ子の本』第一巻の「初出と底本」に基づき記すことにする。(なお、童話集『ちいさいモモちゃん』が『松谷みよ子の本』に収録されるにあたって、ルビがはずされ、漢字・平仮名表記について若干の変更がなされているが、本稿では以下、著者の修正に沿う形で『松谷みよ子の本』所載の本文に拠ることとする。)

- ・「モモちゃんが 生まれたとき」(『続ね、おはなしよんで』昭和38年12月、童心社、原題「モモちゃんがあかちゃんだったときのこと」)
- ・「クーがプーに なったわけ」(単行本初出)
- ・「パンツのうた」(単行本初出)
- ・「モモちゃん『あかちゃんのうち』へ」(単行本初出)
- ・「プーのしっぽ ぱたぱた」(『続ね、おはなしよんで』昭和38年12月、童心社)
- ・「にげだした にんじんさん」(単行本初出)
- ・「モモちゃん おこる」(『びわの実学校』第5号、昭和39年6月、びわのみ文庫)
- ・「モモちゃんのおくりもの」(『味の素おくさま手帖』昭和38年1月、味の素)
- ・「雨 こんこん」(『味の素おくさま手帖』昭和38年9月、味の素、原題「ちいちゃなモモちゃん」)
- ・「プーは おこってます」(『味の素おくさま手帖』昭和38年10月、味の素、原題「ポウはいまおこっています」)
- ・「三つになった モモちゃん」(『大きなタネ』第6号、昭和37年6月、大きなタネの会、原題「ライオンをつれてきたモモちゃん」)
- ・「かみちゃま かみちゃま」(『母の友』昭和39年4月、福音館書店、原題「モモちゃんのおいのり」)
- ・「ママになんか わかんない」(『ね、おはなしよんで』昭

\* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

- 和37年10月、童心社)
- ・「モモちゃん 動物園に行く」(『びわの実学校』創刊号、昭和38年10月、びわのみ文庫)
- ・「風の中の モモちゃん」(『味の素おくさま手帖』昭和38年11月、味の素、原題「ちいちゃなモモちゃん」)

以上のように、童話集『ちいさいモモちゃん』所収作は、その配列において必ずしも発表された順に対応していない。のみならず、単行本刊行時に加えられた作品が四篇に及んでいる。このことは、童話集『ちいさいモモちゃん』が編集されるにあたって、構成上の必要性からこれら四篇の作品が新たに配置されたということであり、さらに掘り下げれば、仮に童話集『ちいさいモモちゃん』を一篇の長篇幼年童話と見なした場合、その構成の不可欠な要素として前述の四篇が組み込まれたと捉えることもできるであろう。そして私見によれば、この書き加えられた四篇の役割には、相当に重いものがあると推測されるのである。本稿においては、主としてこの部分に光をあて、幼年童話集『ちいさいモモちゃん』の構造上の特質を明らかにしてみたいと考えている。

その分析にはいる前に、まずは童話集『ちいさいモモちゃん』のプロットと構成をおさえておこう。

『ちいさいモモちゃん』の冒頭には、「モモちゃんが生まれたとき」という表題に明らかなように、主人公モモちゃんの誕生まもない頃の様子が描かれている。モモちゃんの誕生を祝うかのように、カレーの材料の野菜たちやチューインガム、ソフトクリームたちが訪ねてきて、コミカルなやりとりをする楽しい雰囲気の商品が置かれている。その後、モモちゃんが少しずつ成長し、保育園へ行き、三歳になるまでの成長の姿が描かれている。モモちゃんがおむつがとれパンツをはくようになるさまや、保育園へ通うようになる顛末、さらに男の子の友だちができたり、ママに不満をぶつけるさまなどが描かれ、モモちゃんの成長の過程が鮮やかにたどれるようになっている。それぞれの篇で興味深いエピソードがつづられているが、中でもモモちゃんが銀河鉄道のごとく幻想列車に乗る「モモちゃん おこる」や、三歳になった自らの成長を主張する「風の中のモモちゃん」など注目すべき佳篇も並ぶ。

そうした一連の展開の中で、先述の単行本初出の四篇はどのような役割を果たしているのだろうか。

童話集『ちいさいモモちゃん』に初出の四篇は、「クーがプーに なったわけ」「パンツのうた」「モモちゃん『あかちゃんのうち』へ」「にげだした にんじんさん」である。これらの作品においてとくに注目したいのは、その配列上の特色である。全十五話のうち、第二話、第三話、第四話、第六話に位置している。つまり、冒頭作の「モモちゃんが生まれたとき」を受け継ぎ、この童話集全体の方向づけをする部分が、単行本構成時に全面的に補強されているのである。このことは、童話集『ちいさいモモちゃん』を一篇の長篇童話と考えた場合、きわめて重要な役割を担っていると考えられる。

さらに詳しく見てゆくと、第二話、三話、四話と、第五

話、六話では若干おもむきが異なっているようにも思われる。後の章で触れるが、あらかじめ雑誌に発表されていた第五話が半ば黒猫のプーを主人公にしたようなニュアンスのある作品であり、それを反映させた第六話「にげだしたにんじんさん」は、モモちゃんやプー、白ねずみのチュッチュ、にんじんさん、じゃがいもさん、たまねぎさんなどにぎやかに登場する、ひろがりをもった物語となっている。それまでの物語世界とは違った面をのぞかせているのである。このような点から、本稿では第二話、三話、四話をまず取り上げ、その上に立って第五話、六話について比較しながら考察を行いたいと思う。

ところで、本稿において引用するテキストは、先述のように『松谷みよ子の本』第一巻によることとする。これに先立ち講談社から『松谷みよ子全集』が刊行されており、その第七巻(昭和46年11月)に『ちいさいモモちゃん』が収録されているが、そこでは他の篇も含め二十篇の作品が発表順に収録されており<sup>(注2)</sup>、一度単行本として上梓された『ちいさいモモちゃん』が再構成されている。こうした事情から、本稿では、単行本刊行時の収録の姿をとどめ、さらにその後の作者松谷の意思が反映されている全集である『松谷みよ子の本』所載のテキストを用いることにしたい。

## 2 作品構造の特色—第二話から第四話まで—

童話集『ちいさいモモちゃん』初出の三篇(第二話、三話、四話)の内容はどのようなものなのだろうか。以下、それぞれの篇の特色を考察してゆきたい。

最初に第二話の「クーがプーに なったわけ」を見てゆこう。この作品では冒頭に、

さてそれから、モモちゃんはおっぱいを、ゴックン、ゴックン、のんだので、どんどん大きくなりました。

と語られ、第一話のモモちゃんの誕生を受け、すこやかに成長しているさまが描かれている。そうした成長ぶりが語られた上で、ある日突然黒猫の子があらわれ、いきなり、モモちゃんのママと会話をかわすのである。考えてみればありえない場面であるが、作者は何でもないことのごく自然に両者の会話を描いてゆく。そのまっくらな子猫はママに言う。

それなのに、その子ねこはいうんです。

「ぼくを、このおうちの子にしてくれないかな。」

ママは、あきれていいました。

「だめ、だめよ。モモちゃんのことを、ひっかいたり、かじったりしたら、こまるもの。」

「ぼく、そんなこと、ぜったいにしないよ。ほんとだよ。」

「でも、ねこって、ひっかくものよ。」

「やくそくするよう、それにぼく、すてられちゃって、おうちがないの。」

それをきいたら、ママは子ねこが、かわいそうになりました。

「じゃあね、けっして、モモちゃんのお部屋に、はいっちゃいけませんよ。やくそくよ。」

「はあい。」

子ねこは、やくそくしました。そして、モモちゃんのおうちのねこに、なりました。

この一節から、あるいは夏目漱石『吾輩は猫である』の冒頭部を思い浮かべる読者もいるのではなからうか。子猫が捨てられ、ある家に迷い込んで、家の者の多少の抵抗を受けながらも、何とかその家の一員となり、食と住を保障されるようになるという構想である。いわば「捨て猫譚的構想」とも呼びうるような発端であるが、この子猫の参入により、『ちいさいモモちゃん』の作品世界は、そのプロットの展開に深化がはかられているように推察される。この第二話で「クー」と名づけられた子猫が、こののちモモちゃんとママ、パパのやりとりの間に、相応の関係性を保って加わってゆくのである。

ここで物語世界の設定をあらためて眺めてみれば、主要登場人物は生まれて間もないモモちゃんとママの二人であり、しかもモモちゃんはまだ会話ができるわけではない。したがっておのずとママの側の思いをつづるのが主となり、このモモちゃんとママのやりとりだけでこの物語を進めてゆくのは、なかなかむずかしいところがあったであろう。そこにいわば、子猫とはいえママとふつうの会話が成り立つ「クー」という存在が加わったということは、物語世界の客観化、対象化が図られるという意味でも看過できない構想である。さらにモモちゃんの側から見れば、まだ兄弟もないモモちゃんが、保護者であるママとはちがい、いわば仲間としてかかわる存在として、子猫のクーは重要であると考えられる。これによって、ママからの視点だけでなく、第三者の視点も併せて獲得されることになるのである。

さて、子猫のクーとモモちゃんとの具体的なかわりを描く場面がこの第二話の後半に置かれている。モモちゃんが成長し、じゃがいもやにんじんもすりつぶしたものを食べるようになり、「ぱたぱたと、はいはいする」ようになったある日のこと、次のような場面が描かれる。

ママが、おせんたくものを、ほしていますと、クーが、ニャニャニャニャと、なきたてている声がしました。あんまりさわぎがひどいので、ママはぬれた手をふきふき、おうちの中へはいつてきて、びっくりしました。

モモちゃんがね、クーのごはんのところまで、はいはいしてきて、ンマ、ンマ、といいながら、指をつっこみそうにしているんです。

「まああ、モモちゃん、ぱっちいわ。これはクーのごはんよ。ぱっちいの、クーのよ。」

するとモモちゃんは、いきなりクーのひげをつかんで、ひっぱりながら、いいました。

「クー、クー、クーや。」

これがモモちゃんが、ンマ、のほかに、はじめて、ことばをしゃべったときのことで、このときから、クーはクーに、なりました。

えらいのはクーで、ひげをひっぱりながらも、じっとがまんしていましたよ。

実際にこうした行儀のよい猫はいないのだろうが、モモちゃんの側のやや荒っぽいかかわりによって、モモちゃん

が他者との関係性をもつさまが描かれている。「ぱたぱたと、はいはい」し、自ら行動できる活力が感じられる場面であるが、同時に他者を「クー」と呼び、自他を認識する成長が認められよう。そして、モモちゃんの発話は格別で、そのとき以来、ママのつけた「クー」という名は「クー」と改められるという、モモちゃん一家のささやかな神話ともいべきものが生まれるのである。名の起原というものは説話化、伝説化するものであるが、一家庭のささやかな伝説がここに生まれるという、重い意味合いをもつエピソードと思われる。

次に、第三話「パンツのうた」を見てゆく。ここでの黒猫クーの役割は、一歳になって排泄の習慣を身につけることになったモモちゃんを前に、ママとしっかりした会話をかわすところにある。

モモちゃんの家初めて電話がはいり、かかってきたひろおさんの電話から、ママはモモちゃんのパンツを三十枚も縫わなければならないことを知った。その時、ママは居合わせたパパとも会話をかわすが、より多く黒猫のクーと言葉をかわし、事態を納得してゆくのである。クーが生まれて間もない子猫とはとても思えないような設定だが、そこにこそ黒猫クーに付与された重要な役割があるのだろう。この場面でのママとクーのやりとりは、おむつのとれようとするモモちゃんの成長を対象化し、鮮やかに読者に印象づけるものであろう。ミシンで縫いつづけて疲れたママに向かって黒猫のクーが話しかける場面がある。

「ああ、くたびれた。」

ママが、いいました。

「ねえ、ぼく、おもうんだけど。」

クーが、えんりよぶかく、いいました。

「ぼくのパンツも三十枚、なんてお電話がこなくて、ほんとによかった、とおもいます。」

「ほんとよ。」

ママが、いいました。

「クーのおおさんか、だれからか電話がきて、クーのパンツも三十枚、なんていったら、どうしましょう。ママ、びっくりかえっちゃうわ。さあ、いそがし、いそがし。」

ママの心のはずみを伴ったあわただしさと、クーの落ち着きぶりが好対照をなした場面である。ママはいそがしがりながらも、モモちゃんを「たかいたかい」して、「ばんざーい、モモちゃん、おむつさんとは、さようならよ！」と喜んでおり、そうしたママの喜びに静かに共感を示している黒猫クーの姿が心に残る。このママの動とクーの静の取り合わせが、モモちゃん一家のささやかながら、たしかかな喜びを鮮明に形象化しているようである。

つづく第四話「モモちゃん『あかちゃんのうち』へ」は、『ちいさいモモちゃん』のプロットの展開において大きな飛躍を示す篇である。表題から明らかなように、モモちゃんがよいよ保育園へ行くようになる経緯を描いたものであるが、この様子を黒猫のクーの視点から捉えているところに特色がある。

「ダリアがまっかにさいている、夏の朝のことでした。」と語り出され、一歳になったモモちゃんが保育園に出かける場面が描かれてゆく。この場面においては、語り手は黒猫のプーの視点に寄り添っているように見受けられる。モモちゃんが朝ごはんを食べ終えて新しいエプロンをつけ換え、いつものような朝がはじまったと思っていたプーは、このあとモモちゃんが帽子をかぶせられたのを見てびっくりするのである。いつもとちがう空気を感じとっている。その場面を引く。

「どこいくの？ モモちゃん、どこかへいくの？」

プーは、顔をあらおうとしてあげた手を、そのまんま、おろすのをわすれて、ききました。

「ええ、おでかけよ。」

ママはかばんの中に、パンツを五枚、おしこみました。

「どこへ？ どこへいくの？」

「あかちゃんのうち、へね。」

ママは、ハンカチと、タオルと、ちりがみを、かばんの中におしこみました。

「あかちゃんのうち？ それどういうとこ、とおいの？ ちかいの？」

プーは、ますますびっくりして、ききました。ねえ、だってそうでしょう。「あかちゃんのうち」なんて、きいたこともありません。

「それはね、おしごとをしている、おかあさんのためにね、あかちゃんを、あずかってくれるおうちのな。モモちゃん、もう一つでしょ。だから、ひるまはそこに、あずかってもらうの。ママ、おしごとだから。わかった？」

「それじゃ。」

プーはさげびました。

「ぼくもそのおうちへ、いくんだよね。だってママは、おしごとしてるママだし、ぼく、あかちゃんだもん。」

「あらまあ。」

プーのあわてぶりと、その底にひそむ不安感を読者は感じとることであろう。プーの気持ちの混乱は、明らかに自分だけが家に残り残される不安に根ざしている。プーはもともといたん捨てられ、この家に拾われた体験があり、またひとりぼっちになってしまうのではないかという不安と危惧が心の中ににわかひろがったのであろうと想像される。また、この物語を語り聞かせてもらっている幼児たちも、プーのひとりぼっちになる不安には、おのずと共感を示すであろうと考えられる。一般に子ども向けの絵本・童話においても、『とん ことり』『はじめてのおつかい』（ともに筒井頼子・作、林明子・絵）や『ごんぎつね』（新美南吉作）など、ひとりぼっちになることの不安のモチーフを底にひそめた作品は数多い。そうした幼い子どもたちの共感の場に沿う形で、黒猫のプーの不安は描かれている。このモモちゃんが初めて保育園に行く場面は、ママとモモちゃんとのかわりの中で描いてゆくことも可能ではあったろうが、家に残り残されてゆく者の不安という視点から描かれてゆくことにより、視点が複眼的になり、物語世界が

より立体的に浮かび上がる仕組みになっているようである。考えてみればモモちゃんはまだ一歳になったばかりで、モモちゃんの心理を立ち入って描くわけにはいかず、その意味でもママと黒猫のプーの心理のやりとりを描くことにより、場面が生き生きと構成されたと言えるであろう。

そしてさらに、モモちゃんとママが家を出かけてゆくときの、取り残された黒猫のプーの姿が哀感を深めている。読者の幼児よりも、むしろ語り聞かせている大人の側において、哀切の情をさそわれるところがあるであろう。「カラカラと、うば車をおして、ママはでていきました。うえい、うえい、モモちゃんがさげんでいるのが、しばらくきこえ、やがて、しーんとしずかになりました。／ぼく、おにいちゃんのかしら。……おにいちゃんて、つまらないなあ。……プーは、しっぽをなめるのもわすれ、前足の上に、あごをのせました。」という、物音がしだいに途絶えて、静けさの中にうづくまるプーの姿は、ほのかな象徴性をまっとうしているようでもある。

ところで、この「モモちゃん『あかちゃんのうち』へ」のプロットは、こののち、さらに興味深い展開を見せている。

保育園へ行ったモモちゃんは、最初は何ごともなくすごしていたのであるが、ヨーグルトを食べクマのおもちゃと遊んでいるうちに急に黒猫のプーのことを思い出すと、よちよちと立ち上がり、ひたすらプーの名前を呼んでさがしはじめたのである。最初プーとは自動車のことかと思った先生が往來の自動車を見せてやっても泣きやまず、とうとう困った先生は、モモちゃんの家へ電話をかけたのである。

当然モモちゃんの家にはパパもママもいないのであるが、ここでプーが大活躍をする。なんとプーは、かかってきた電話の対応をし、保育園の先生の方も、何の不思議もなく、プーと会話をかわすのである。『ちいさいモモちゃん』のところで現れる適度な空想性を伴ったエピソードである。この電話のやりとりで、保育園の先生が「あの、プーというのは、なんでしょう。おこころあたりは、ございませぬか。」とたずねたのに対し、プーは即座の判断と行動力を示す。その部分を引こう。

「おこころあたりですって！」

プーはさげびました。

「それは、ぼくのことですよ。じゃ、モモちゃんは、ぼくにあいたがっているんですね。そこへは、どういくんですか。え？ 森の中の道？ はい、わかりました。ぼく、すぐにいきます。」

プーは、てっぽう玉のように、とびだしました。野原をこえ、森をぬけて、「あかちゃんのうち」に、つきました。

そして、モモちゃんのひざに、とびこみました。

黒猫のプーは、ふだんはどちらかというと、思慮深い思弁型の猫であると思われるが、このモモちゃんの危機を察知したときの行動力は抜群である。保育園に着いた時の描写もすべての余剰を省き、「そして、モモちゃんのひざに、とびこみました。」と直截、端的に一文で表現している。このプロットの運びの速度感は快い。そして、この篇の末尾

に置かれた、

プーが、モモちゃんといっしょに、毎朝「あかちゃんのうち」に行くようになったのは、こういうわけなのです。

というゆったりとした収束の語りと好対照をなしている。

むろん、実際に飼ひ猫が毎朝子どもといっしょに保育園に行くことは考えにくいのであるが、モモちゃんが保育園にはいることによりママからモモちゃんを見るという視点が遮断されるため、黒猫のプーがモモちゃんに寄り添うという視点がおのずと必要になってきていると言えるであろう。

以上見てきたように、童話集『ちいさいモモちゃん』の第二話、三話、四話は、モモちゃんが生まれてから一歳になり保育園へ行くようになるまでの成長の過程を描いているが、ママのまなざしとは別に、黒猫のプーの視点が設定され、モモちゃんの成長を複眼的に描くことが可能となっている。すなわち、作品構造の中でモモちゃんの成長の姿が鮮やかに対象化されていると言えるであろう。黒猫のプーの存在は、単にモモちゃんの家ペットが同居したというだけではない、『ちいさいモモちゃん』の作品構造にかかわる重要な意味を担っていると考えられるのである。

### 3 第五話、第六話の作品構造

本章では童話集『ちいさいモモちゃん』第五話、六話について考えてゆく。前章で考察した第二話、三話、四話とは異なり、新たな段階にはいったような印象を受ける。あらかじめ発表されていた第五話「プーのしっぽ ばたばた」(『続 ね、おはなしよんで』昭和38年12月)を受ける形で、単行本編集時に加えられた第六話も基本的には第五話と共通の作品構造を有しているように思われる。

まず第五話「プーのしっぽ ばたばた」であるが、この篇ではそれまで成長するモモちゃんを独特の視点で捉えていた黒猫のプーの存在が、より表舞台に出て、プーの心理と行動を中心に語られているような感がある。

冒頭で一歳を過ぎたモモちゃんの成長ぶりをママが自慢げに語る場面がある。

「ねえプーや、プーはもうせん、ぼくは、生まれたときから、ひとりでおしっこができますよって、いばっていたけどね。モモちゃんだってもう、ちっこ、っっておしえるようになったわよ。それから、汽車ポッポもひっぱるし、やっぱりねこより、人間のほうが、えらいな。」

このようにママに言われた黒猫のプーはくやしがり、「ねこだって、えらいですよ。しっぽがあるもん。しっぽふれるもん。ぼく、じょうずだもん。」と言って、しっぽをばたばたふって見せたのだが、それだけでは足りないと考え、「りこうなところを見せなくっちゃ」と積極的な行動に出るのである。

プーは、庭で見かけた「おいしそう」白いねずみをつかまえ、口にくわえて意気揚々とママの前に出て見せる。これは猫としては当然すぎる行動なのであるが、それを見

たママはびっくりし、白ねずみを助けるのである。プーは、自分がモモちゃんと比べて一人前に行動できることを示したかったのであるが、それがママに分かってもらえないという一種の不条理を味わう。このように黒猫のプーがいだいた不条理が、この第五話のモチーフを形成し、一篇の童話を成立させていると考えてよいであろう。その意味で第五話は、モモちゃんよりもプーを中心とした物語を構成していると思われる。

物語はこののち、ママに救われた白ねずみにモモちゃんが「チュッチュや、チュッチュや」と言いながら寄ってゆき、パンくずを与えるなどの挿話が描かれ、プーは半ばのけ者にされた形で不満を覚える。

ぼくのとってきたねずみなのに、とっちゃってさ。ありがとう、ともいわないしさ。おりこうね、ともいわないしさ。だあれもぼくのこと、考えてくれないんですからね。パンもくれないし、いいですよ。

プーはこう思って、皆から離れ、ぷんぷんしたまま庭の隅で寝ていた。が、夜になっても誰も探しに来ず、空腹になり、家へ帰ろうかと迷いはじめたところに、運よくパパが帰ってきて、プーはいっしょに家へとはいることができた。そして、プーが白ねずみをつかまえたことをパパに告げると、パパは、次のように言ってプーの行いを褒めるのである。

「ふつうのねこなら、たべちゃうのに、えらいぞ、プーは。」

白ねずみをくわえてきた行動を、ママとは別の視点から褒めてくれたパパの言葉に、プーはすっかりそれまでの不満も忘れ、「ああ、だいすきなパパ、パパならぼくのこと、ちゃあんと、わかってくれるんだ!」と、喜びにあふれ、しっぽをばたばたとふりつづけるのである。

以上が第五話のプロットであり、この篇は明らかに黒猫のプーの心理と行動をたどる形で描かれている。第四話までは、モモちゃんの誕生から一歳を過ぎるまでの成長の姿を中心に置き、その姿を鮮やかに浮かび上がらせる視点として黒猫のプーの存在が機能しているところがあったけれども、この第五話に至ると、見てきたように、モモちゃんの成長ぶりを黒猫のプーと比較するママの言葉を踏み台として、プーの自負心が刺激され、ひとついいところを見せようと考え行動するプーの姿が描かれている。そして、白ねずみをとってくるというプーの自慢の行動がプーの意に反してママに否定されるという、ママとの意識のすれちがいとプーの反発が語られ、そののち帰宅したパパの言葉により収束するという一連の心理が描かれているのである。そこには明らかに黒猫プーを中心に据えた一篇のドラマが見られると言えるであろう。

このように見てきたとき、第五話に至って黒猫プーには一種の意識の変化がきざしたようにも思われる。それまでは、捨て猫であったところを拾われたプーがモモちゃんの絶対の味方として位置づけられていた感があるが、第五話ではママやモモちゃんに対してやや距離を置いたまなざしが見られなくはないであろう。むろん、プーは基本的には

モモちゃんの家の一員として絶対の信頼感で結びついているのであるが、それを基底としつつも、ママやモモちゃんがぼくのことを大事にしてくれないというプーの幾分か相対化された意識がきざしていると思われる。

次に、第六話「にげだした にんじんさん」を見てゆく。この篇では、冒頭に、

ある日のことでした。

モモちゃんは、うらの原っぱで、プーと白いねずみのチュッチュと、おままごとをしていました。

と語られているように、第五話で登場した白ねずみのチュッチュが、プーとともにモモちゃんを中心とする遊びの仲間に加わった様子が提示される。白ねずみのチュッチュも仲間としてモモちゃんやプーと対等の会話をかわしており、大枠としてはモモちゃんの成長の物語でありつつ、併せてここにはモモちゃんの仲間たちの相互のコミュニケーションの場が形成されていると言えるであろう。

そして、物語はさらに、そのコミュニケーションの場に第一話「モモちゃんが 生まれたとき」で登場したカレーの材料の野菜たちを登場させるのである。じゃがいも、にんじん、たまねぎさんたちは、カレー粉を背負いながらモモちゃんの家へと向かってゆくところであった。「カレーだって、たべられますよね、モモちゃん。」とたずねるたまねぎさんに、モモちゃんは、

「うん、モモちゃん、なあんでも、たべるもん。でも、にんじんちゃんは、やだあ。」

と答える。

と、その時、突然「うえーん」と泣き声がし、モモちゃんにきらわれたにんじんさんが失踪するのである。以下、物語は、逃げ出したにんじんさんを皆が捜しまわるストーリーへと展開してゆく。途中、うさぎやもぐらなど今までになく多彩なキャラクターが登場するのだが、そのような展開の中で、黒猫のプーの役割の重みはいったん後退したようにも見受けられる。つまり、物語のプロットの軸は、モモちゃんの「でも、にんじんちゃんは、やだあ。」の言葉をきっかけにしてその場から失踪したにんじんさんの心理、さらににんじんさんの探索劇にあり、黒猫のプーもそうした主要プロットの中に組み込まれていると言える。その意味で黒猫プーの造型は、今まで考察してきた第二話、三話、四話に見られたような、モモちゃんと深くかかわりつつプロットの軸に根ざすあり方とはちがってきている。明らかに黒猫プーの描かれ方が第五話あたりから変質してきていると言えるであろう。それまでのモモちゃんを対象化する黒猫プーの独自の視点というものが薄らいできていると思われる。

ただ、この第六話で注目したいのは、終結部における黒猫のプーの役割である。皆が捜しまわってもどうしても見つけられないにんじんさんを、結果的に最後に見つけ出すのがプーなのであるが、こうしたプーの行動力は、先に見てきた第四話の終結部、すなわち初めて行った保育園でプーの名を呼んで泣きやまないモモちゃんのもとへ即座に駆けつけるプーの活躍とつながるところがあるであろう。た

だし、第四話に見られたようなモモちゃんの無二の味方としての絶対的な活躍ぶりではなく、先述のように多分に結果的なものではあるが。そのラストの場面では、皆はにんじんさんがいなくなったことにしんみりとしているのであるが、黒猫のプーだけはいささか反発しており、「へっ、やんなっちゃう。めそめそしてさ。ぼくは、にんじんなんて大きらい。そりゃ赤くて、かわいいけどさ。ぼくが赤くて、すきなものといったら、きんぎよだよ。しっぽふってさ。きれいで、おまけにおいしいもん。それを、ぱっとつかまえるときの、その気もち……。」と小川の岸でひとり思っている。

すると、川の流れの中にふと赤いものが見え、プーはすばやく金魚と思って川に飛び込んだ。それが実は金魚ではなくにんじんさんで、先述のように結果的にプーはにんじんさんを助け出すことに成功したのである。ラストシーンを次に引いてみる。

やがて、ずぶぬれになり、きんぎよではなくて、にんじんさんをくわえたプーは、うらめしそうに、きしにとびあがりました。

「にんじんちゃん！」

みんなはどっと、にんじんさんを、とりかこみました。そして、よかったね、よかったね、といいました。

よくなかったのは、プーで、からだじゅうべろべろなめながら、がっかりしていました。

でも、お日さまは、ぼかぼかとあたたかく、プーの毛をかわかしてくれましたし、そのうえ、ゆうかんなねこ、プー、という名前と、バターを半ポンド、ごほうびにもらったので、やっぱりよかった、とおもいました。

「ゆうかんなねこ、プー」という名前をもらうほどの活躍をプーはなしとげたのだが、この場面を単にプーの思い違いの結果とのみ捉えるのはいささか単純にすぎないように思われる。たしかに本文には金魚かと思って飛び込んだ旨が記されているが、おそらくプーはどこかの時点でその赤いものがにんじんであることに気づいたはずである。それを承知の上で口にくわえ、岸に上がってくるところには、やはりプーなりの思いがあったと考えられる。しかし、プーは「がっかり」した様子を見せながら自らの体をなめているのであるが、ややうがって言えば、ここにはにんじんを救助したことを主張したくないプーなりの美学があるようにも思われる。

以上見てきたように、第六話における黒猫のプーは、第五話を受け継ぐ形で、モモちゃんの家やモモちゃんの遊び仲間の中でその存在が相対化され、ややすねた心理と行動が描かれている。第二話、三話、四話では、モモちゃんの成長が、ママのまなざしとは別に黒猫のプーの視点から語られる傾向があったが、第五話、六話においては、黒猫プーのいくぶんか素直ならざる個性が鮮やかに描き出されているように思われる。そこに、黒猫プーの造型上の新味が打ち出されていると考えられよう。

#### 4 『ちいさいモモちゃん』の作品構造

本稿では、第二話から第六話までの作品構造を考察してきた。生誕間もないモモちゃんが一歳を過ぎ、二歳になるころまでを描いているが、その中で、モモちゃんを描く視点として黒猫のプーの役割が重要であったと考えられる。それを詳しく分析すれば、先に論じたように第二話、三話、四話までと、第五話、六話では質的に違いが認められたけれども、第二話から六話までを全体として眺めれば、モモちゃんと黒猫プーの位置関係に独自の密接な相関性が存したと言えるであろう。

それに対して、第七話以降の作品世界は、より多様化を示していると言える。むろん基本的には黒猫のプーがモモちゃんのパートナーとして寄り添う形はあるが、第二話、三話、四話に見られたような緊密な関係は後退しているようである。このことは、言い換えれば、それだけモモちゃん的生活圏にひろがりが生じてきたためと考えられよう。

ここで第七話以降の内容を一瞥すれば、第七話「モモちゃん おこる」では、保育園に迎えに来るのが遅れたママのことを怒って、モモちゃんがひとり改札の向こうへと駆けていってしまうシーンが描かれ、第八話「モモちゃんのおくりもの」では、モモちゃんにコウちゃんという男の子の友だちができ、それまで保育園にいっしょに行っていた黒猫のプーが、送りに行ったママといっしょに帰ってきてしまうというエピソードがつづられている。プーがモモちゃんのパートナーとして描かれてはいるが、それは以前のように絶対的な無二の関係にあるというよりは、モモちゃんの家の一員としての位置にまで後退を見せているような印象を受ける。さらに第九話「雨 こんこん」では、赤いかさと赤いながぐつを買ってもらったモモちゃんが庭で遊ぶ姿が描かれ（プーは登場しない）、第十話「プーはおこってます」では、ママの頬をひっかいたのがモモちゃんであったにもかかわらず、プーがひっかいたとママが帰宅したパパに言い、ぬれぎぬをきせられて不満げなプーの姿が描かれている。この第十話では少なくともプーはモモちゃんのかわりにパパに怒られてもいいという気持ちはもっていないように思われる。以下、詳述は省くが、第十一話「三つになった モモちゃん」ではもう赤ちゃんではないモモちゃんの心の成長が描かれ、第十二話「かみちゃま かみちゃま」ではモモちゃんがプーと「およめちゃんごっこ」をする物語が、第十三話「ママになんか わかんない」では水ぼうそうになったモモちゃんのエピソードが、第十四話「モモちゃん 動物園に行く」では、保育園でコウちゃんと動物園に行くつもりになって生き生きとした空想に浸る場面が描かれる。そして末尾の第十五話「風の中の モモちゃん」では、三歳になったモモちゃんの保育園での自立心が描かれている。物語世界は多彩なひろがりを見せ、遊びや友だちとのかかわり、心の成長などが鮮やかに語られているが、黒猫のプーの登場場面は、前半に比しだいぶ少なくなっているように見受けられる。主人公のモモちゃんが飼い猫のプーとの間に形成される世界だけにとらわれることなく、さらに広い世界に活動領域や関心を拡

大させているためであるが、併せてそのことはまた、モモちゃんの成長に伴い、モモちゃんを語る多彩な視点を作者が獲得しつつあることをあらわしているであろう。これは子どもの成長をモチーフとする物語のある意味で普遍的特質であるが、本作品ではその特質が黒猫プーの個性的な視点や豊かな空想性を織り込みながら鮮やかに形象化されている。

#### 結

松谷みよ子の童話集『ちいさいモモちゃん』は、全十五話がそれぞれ短篇として独立しながらも、全体として長篇幼年童話としての構造をそなえている。この十五話の制作時期は先に見てきたようにいろいろであるが、『ちいさいモモちゃん』編集時に雑誌既出の作が集められ、さらに新たな作が追加され、童話集としてまとめられた。この編集時において、それは単に「童話集」としての次元ではなく、長篇をなす一個の作品としてのテーマとプロットを獲得したと考えてよいであろう。とくに編集時に加えられた第二話、三話、四話には乳幼児のモモちゃんを描く一つの個性的な視点として黒猫のプーの存在が目玉された。モモちゃんとママとのかかわりが中心となりがちな物語世界に新鮮な視点を提供しており、その物語構造は高く評価されるであろう。本稿ではこうした視点を軸に、主として『ちいさいモモちゃん』の前半世界を考察した。

『ちいさいモモちゃん』は、その母性の文学としての特質が評価されている。「とりあげられた素材が、心にくいほど幼児の心性にぴったり」合うとする鳥越信の松谷みよ子評（『ジャムねこさん』「解説」、昭和42年、大日本図書）は本作にもあてはまり、母がわが子に、その乳幼児の頃のことを語るような密接な感覚に特色がある。他方で黒猫プーの描かれ方にはまたおもむきの異なった点があるようであり、とくに第四話の「モモちゃん『あかちゃんのうち』へ」では、保育園で泣きやまぬモモちゃんを助けるべく活躍するプーの姿が描かれているのである。これは基本的にはママの知らないところで生じたエピソードであり、『ちいさいモモちゃん』の中ではやや特異な構造を有していると言えるであろう。このような物語構造としての幅の広さを有しながら、全体として母が子にその乳幼児期を語り聞かせるという基本構造が据えられているのである。

以上、本稿では童話集『ちいさいモモちゃん』をめぐる、その物語構造の一端について論じてきた。今回は見てきたように、童話集編集時において加えられた各篇の特質と構造を探究することに主眼を置いたが、この一篇の長篇幼年童話とも言いうる『ちいさいモモちゃん』の魅力は多彩である。先にも言及したように宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を想起させる構成をもつ篇や、短篇ながらモモちゃんの成長が切なく伝わってくる最終話「風の中の モモちゃん」など豊かな童話世界が秘められている。今後そうした要素にも目を配った上で、あらためて『ちいさいモモちゃん』の物語世界を総体的に把握する視点に立ち論究を試みたいと考えている。

注

- (1) 『松谷みよ子の本』 第一巻（平成6年10月、講談社）711頁-713頁参照。
- (2) 『松谷みよ子全集』 第七巻には、『ちいさいモモちゃん』として、既述の十五話のほか、「とおりゃんせ、とおりゃんせ」「ハナタカ博士（はかせ）のさいばん」「モモちゃんどこや」「しっぽのあるおひめさま」「おいしいものがすきなくまさん」の五話が収められている。